

## AFL-CIOを訪ねて

著者	森戸 太郎
雑誌名	社会労働研究
巻	11
ページ	258-271
発行年	1959-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00017500">http://hdl.handle.net/10114/00017500</a>

## AFL—CIOを訪ねて

森 戸 太 郎

ワシントンのほぼ中央、第十六番街と学校通の交叉点

の東北角に、開拓時代の小さい聖ジョン監督が残っているが、その北隣りに、アメリカ労働総同盟<sup>(1)</sup>(AFL—CIO)

の総本山、鉄筋コンクリート八階建の労働宮がそびえたっている。南、ラファイト公園をへだててホワイト・

ハウスと対峙し、更にワシントン記念碑の白堊のオベリスク(尖塔)を望見する、この形勝の地は、東京であつ

たらさしづめ馬場先門通りの明治生命館に該当するであ

ろうか。このビルディングの西側正面広場には、小型の組

合の上に大きい星条旗が、へんぽんと朝風にひるがえつ

ているあたり、正に資本主義王国御用組合の面目躍如た

るものがある。

(1) AFL—CIO=American Federation of Labor and Congress of Industrial Organizations.

わたくしは昨年(一九五八年)十一月二十一日にここを、この豪華な労働宮殿、彼等の所謂「労働の家」

(House of Labor)を訪問したのであった。その正面右側の基礎石には、NOV. 15. 1881. A. F. L. George Me-

any Labor Omnia Vincitと彫まれている。然し一八八

一年はこのAFLの前身である米加組織労働組合同盟の

結成された年であるから、George Meanyは、この総

同盟の第三代現役総裁<sup>(2)</sup>(President)であるので彼の在任

中に落成したと云う意味であろう。

(2) 普通「会長」と訳されているが「総裁」と言う方が、適訳と思われる。

この建物は極く最近のもので、一九五五年四月二十日に地鎮祭 (Cornerstone laying ceremony) を行い、約一カ年余日を費し、翌年六月四日に落成式を挙げている。この両式典ともアイゼンハウワ大統領始め労働長官其他貴官顯商等が列席している。その式場で総裁は「この建物は、米國憲法中最も高貴なる理想と基本的人權宣言 (Bill of Rights) 中の核心たる自由のために捧げられる。又この AFL—CIO の建物は平和の維持に、更に自由と平和によつてのみ確保される機会均等と人類進歩の大発展に捧げられるものである」と述べている。而してこのアイク列席の写真入りパンフレット「労働の家」 (The House of Labor) を宣伝撒布している点から見ても問はずしてアメリカ労組の性格がうかがわれるであろう。重い硝子戸を押して、この建物一階の広大なロビーに

AFL—CIO を訪ねて

入ると驚いたことには、正面東側の壁全体が絢爛たるモザイクの壁画で飾られ、縦は十七呎で天井に達し、横は五十一呎もあるその巨大さに圧倒される。左手隅を見ると金髪碧眼の受付嬢が人工マホガニー材の小机に坐わり、軽く組んだきしやな膝下が鏡のように光る床面にゆらめいていて、どう見ても労組本部と言うよりは何処かの美術館にまぐれ込んだと言う方が当っている。然しこの壁画をよく見ると只の美術館ではない。銀灰色と黄金色並に浅黄緑を基調としたクラシック・ビザンチン式モザイク手法で、初期の開拓時代から現代に至るアメリカ労働史が描写されていて、その画面を流れるテーマは人間による機械の制御である。このモチーフは、トマス・カーライル (Thomas Carlyle) の名句「労働は生命である」 (Labor is life) からとつてゐることだ。画面の中央には天井に達する大きさで、筋骨たくましいアメリカ労働者の突立った英雄的な姿が画かれていて、彼は右手で、その前の御影石の台に腰かけて息子に読書を教えて

いる妻の肩をおさへている。これはその息子によって表象される次代への労働と社会生活の基礎教育を意味しているとのこと。又彼の左肩には、つるばしと両刃の斧を担ぎ、左腕には交通運輸を表象するロープをさげていて、き然たる態度で前方をにらんでいるなかなか堂々たるものである。画面上部向って左が、アメリカ初期の交通機

り、之が施工は組合の熟練工があたったとのことだ。そしてこの壁画はこの組合本部に働く職員並にここに出入する組合各級幹部にインスピレーションを与えているとのことだったが、さてそのインスピレーションたるや、闘志にあらずして真美探究のそれではあるまいか。

関即ち快走帆船、幌馬車、駅馬車、河蒸気船や初期機関車などであり、向って右がその反対に現代のもので、ジェット飛行機、自動車、トラック、ディゼル機関車等で偉大なる未来の表象だ。画面の下部の左が農林鋤業、右が漁業工業等の労働状態を画いてある。兎に角このアメリカ第一の大壁画は、世界に冠たりと自称するアメリカ物質文明と労働との関係を物語っている訳であるが、又

右後背、即ち表通側の壁を振り返ると、そこには、AFLの初代の総裁 Samuel Gompers 彼の後継者 William Green 並に CIO の前会長 Philip Murray 三氏の肖像浮彫り木製円板 (Wood Medallion) がはめ込んであった。三人共横顔だが、Gompers, Green の両氏は眼鏡をかけた左顔、Murray 氏は眼鏡なしの右顔である。この左右は、その出身 AFL と CIO にどんな関係があるのか迄は聞き洩した。

このモザイクのタイルが大したもの、黄金色のものが

案内役は CIO 系の Henry Rutz 氏である。

五色、大理石のものが六色、殆んど皆イタリーから輸入したものとのこと、又このデザインはカンサス (Kansas) 生れの著名な芸術家の Lumen Martin Winter 氏であ

この壁画の背後に廻るとエレベーターがあり、その又正面の壁には、英国労働組合会議 (British Trade Union Congress) から贈られた「労働の勝利」 (The Triumph

of Labour) と言ふ銅板浮彫がはめ込んである。これは長方形で畳一枚位の大きさだが、その木の枠が又曰くづきのしろもので嘘かホントか真偽の程は分らぬが、例のトラファルガルの海戦にネルソン提督が坐乗していた旗艦ビクトリア号の古艦材であるとのことだ。この奥に図書室があるが、そこに通ずる廊下の両側の壁はなかなか綺麗な“Wall paper”で張ってあって、自慢のようだった。然し我国ではこの程度のはさして珍らしくない。

AFL—CIO Library即ちその大きさから言つて図書室よりも図書館と言うべきだろうが、これが、この建物の奥の方の一階と二階を占めていて所謂アメリカ式に清潔で小綺麗に整頓されてゐる。書架は七段に区切られているが、最上段の書物でも踏台なしで誰でも手が届くので便利だ。この一番奥に、例の Samuel Gompers 氏が数人の労働者にかこまれた銅像の縮小されたものが置かれてある。(この原型は市内の Gompers Square に見られる。) その右に鉱夫出身の William Green 氏の矢張

AFL—CIOを訪ねて

り小型銅像があり、これは一九五〇年に Jewish Labor Committee から贈られたと彫まれてあるところを見るに二代総裁は猶太人であつたのであろうか。これも尋ねる訳に行かなかつた。更に Gompers 像の左には筋骨たくましい労働者の小型の立像がありその台板にはフランス語で Le houilleur (炭坑夫)とあつた。ここで案内役 Rutz 氏の説明が始つた。この図書館には労働並に労働法等関係図書が二万五千冊もあり、五千のパンフレット、多数の新聞切抜きなど、過去百五十年にさかのぼる労働史のコレクションで、又世界の労働関係の雑誌の九五%は集収されていると言う。又、ゴンパース・コレクションなるものがあつて、そこには初代の AFL 総裁の手紙とかメモとか其他歴史的文書が集められていて、この館内で最も神聖(?)な区域とされている。案内役の話によると、このゴンパース氏は、英国に生れ十二才の時にその両親に伴われてアメリカに渡つた。その頃既に葉巻煙草組合があつた由で、彼はこの葉巻煙草職人として身

を起し遂にこのAFL初代の総裁となり、アメリカ労働界の神格化的存在となったのだが、彼は若い頃はマルキシスト(Marxist)であった。ところがロシア革命を見るに及んでマルキシズム(Marxism)から脱退したのだ

と言うが、果して彼のマルキシストとはどの程度のものであったのか詳しく尋ねる時間もなかった。彼は一九一九年にはウイルソン大統領(Woodrow Wilson)につい

て渡欧し、International Labour Organizationを組織した功績は極めて顕著で、このILOだけが国際連盟(League of Nations)から国際連合(United Nations)にひきつがれた只一つの国際労働機関であると説明に油が乗って来た。然し私は書架の書籍をぶらぶらと見て歩いていた。ここから又廊下に出て、エレベーターで一挙に八階に昇ると、その最初の八〇一号室が所謂総裁室(President Office)である。扉が半開きだったので中をのぞくと、控間に書記か秘書らしき者が二、三人見え、その壁には富士山と帆船の錦絵の額が掲げてある。われ

われ素人が見ても極めて下手糞で、御世辞にも名画などと言うものではない。日本の労組の前田保(?)さんから贈られたものだとのことだったが、腑に落ちない。

その先の執行委員会議室(Executive Council Conference Room)の前のロビーの壁には、ゴムパース・グリーン等の当労組の最高指導者の当身大の肖像画が掲げてあるが、この油絵はなかなか立派で美しい。

執行委員会議室は、南向きで東西に長い方形の室で天井が高く極めて明るい。そしてその室一パイに大きい楕円形のテーブルが一つあるのだが、大きいと言っても一寸想像つかぬ程だ。兎に角、このテーブルの周囲に二十九人の執行委員—アメリカサイズの巨大漢—がゆっくりと坐して会議の出来る程の大きさである。それとそのテーブルの中央部はえぐりとして空洞になっているから、丁度板で作った縦長のアルファベットのOを横に倒してある形と思ったら間違いない。二十九ヶの椅子の中で一つだけが二吋だけ高いのだがこれが総裁用だとのこと

だ。この室にはこの椅子とテーブルの外に星条旗が安置してあるだけで外に殆んど何にもない。そして、この椅子・テーブルは北米産の胡桃材で製られているし、周囲の壁板はアフリカ産の銘木だとのことだが、誠に豪華なものである。室内温度は常時摂氏二十度になっているし、又一方の隅で拡声器なしで話す言葉が他の反対側の隅にいて充分に聞取れるように音の調節も考慮してあると言う。その上、南窓のガラス越しに、ホワイト・ハウスが眼下に見下せると言う位置なのだから労組の会議室よりも寧ろサナトリウムに使った方が効果的であろう。

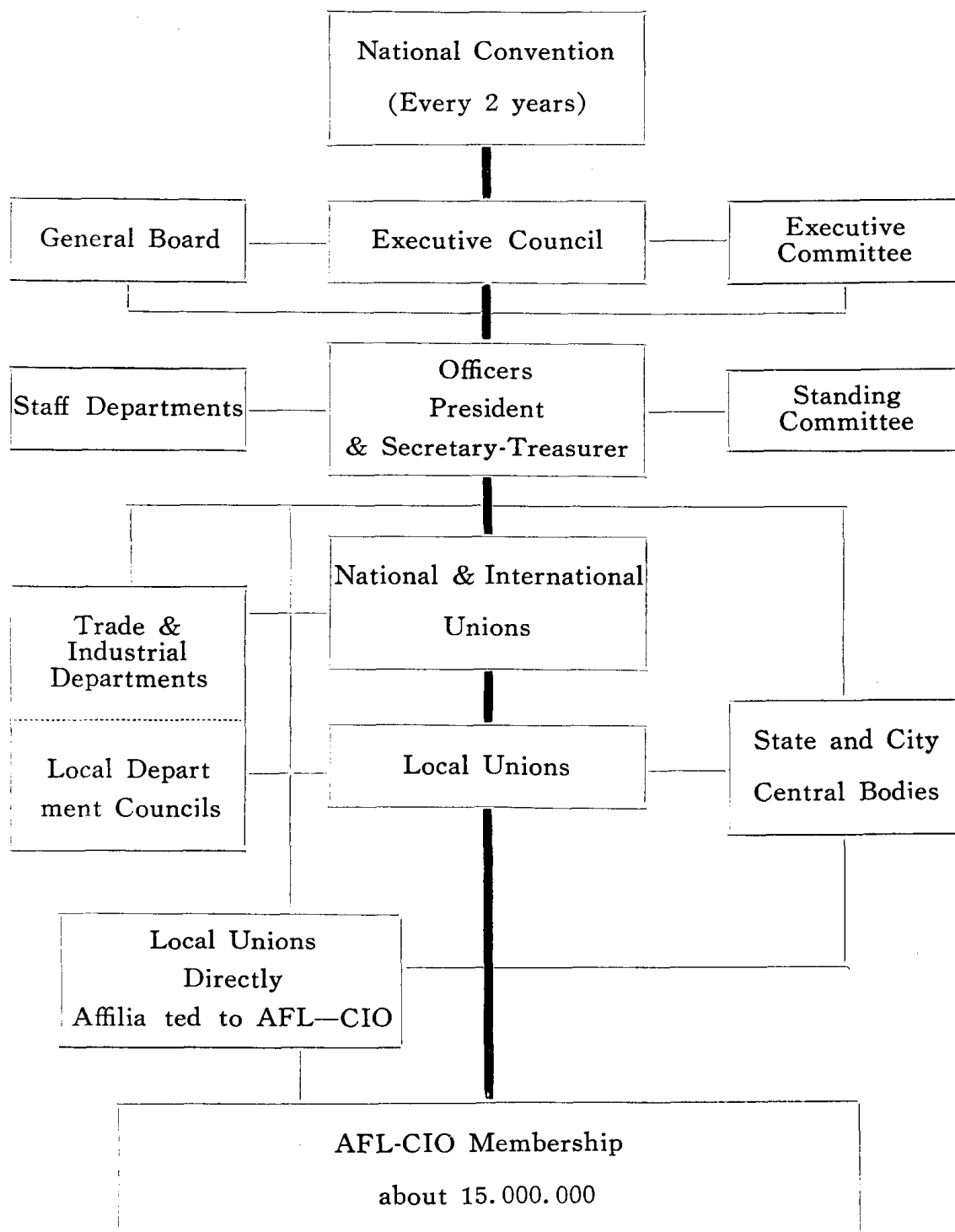
七階以下は大体事務室で、これもアメリカ式と言うのか、仕切りがなくて誠に広々として入口から反対側の出口まで見通せる。デスクの配置も我国などのに比すれば雑然として各自勝手の方を向いているように思われる。六階では National Joint Board for Settlement of Jurisdictional Disputes や Building and Construction Industry と言った室のネームプレートが記憶に残った。

AFL-CIOを訪ねて

四階に下りて Union Label and Service Trade Department と言う室の隣りの小会議室に招じ入れられて、案内役のラッツ氏から次のような組織構成表 (Organization Chart) を貰って説明を聞いた訳である。

一九五六年一月の調査統計によると組合員総数は約一千五百万人で、これが六万の地方組合と八百の AFL-CIO 直属組合とを構成している。六万の地方組合が更に百三十九の国内並国際 (カナダ及びメキシコの組合が加盟しているため) 組合連合となり AFL-CIO のボディをなしている訳で本部をワシントンに置く。職員は、総裁及び財務部長と (President and Secretary-Treasurer) 之を補佐して幕僚部 (Staff) と常設委員 (Standing Committee) がある。最高意志決定機関は二年毎に開かれる総会 (National Convention) であって、現総裁 George Meany 氏並に財務部長 William F. Schnitzler 氏の如きは AFL-CIO の合併創立総会で選任されたのである。総会迄の二年間は、執行委員 (総裁、財務部長

# ORGANIZATION CHART OF AFL-CIO





Standing Committee	Staff Department	Trade & Industrial
Civil Rights	Accounting	Department
Community Services	Education	Building Trades
Economic Policy	International Affairs	Industrial Union
Education	Legislation	Label Trades
Ethical Practices	Library	Maritime Employees
Housing	Organization	Metal Trades
International Affairs	Publications	Railway Employees
Legislation	Public Relations	
Political Education	Public Relations	
Public Relations	Purchasing	
Research	Research	
Safety and Occupational Health	Social Security	
Social Security		
Veterans Affairs		

及六副総裁」と参事会(General Board)の補佐を受けて執行委員会(Executive Council)が、代決議機関となる。このExecutive Councilの構成員は、総裁、財務部長と二十七人の副総裁である。

さてその運営もなかなか派手で、聯邦政府並に各州政府にその代表を派遣し、代表部を常設していることだ。がその目的とするところは次の如くと標榜されているが、まあ賃金を中心とした労働条件改善の職業的な交渉機関に過ぎないようである。

- To improve wages, hours and working conditions for workers.
- To bring the benefits of free collective bargaining to all workers.
- To achieve equality of opportunity for all workers, regardless of race, creed, color or national origin.
- To support legislation which will aid workers

and to oppose harmful legislation.

- To protect and Strengthen democratic institutions and to preserve America's democratic traditions.

- To aid in promoting the cause of peace and freedom in the world.

- To protect the labor movement against corruption and racketeers.

- To safeguard the labor movement from Communists, Fascists or other totalitarians.

- To encourage workers to register and vote and to exercise fully their responsibilities as citizens.

- To encourage the sale of union-made goods through the use of the union label.

組合費は週平均三―四弗だと言うから年総額は二十億弗に近う。下級組合から本部への納金は組合員一人当り

月額五仙とのことだが、それでも九百万弗と言う巨額に達する。この本部事務局は四百人からの職員を擁し十三から十五の部局に分れていてその部局長 (manager) は皆大学出身者である。然し組合幹部指導層は労働者出身でかためてゐるようで、その補助者 (assistant) に大学出身者をつけている。と言ってもこの労働者出身の組合幹部も決して無学文盲ではなく、皆何にかの方法で勉強したもので、現にこの説明役のラッツ氏も、ウイスコンシン州のミルウォーキー組合で、その地の大学に経済学の勉強をやられたとのことだった。

全般的に見て組合職員は極めて好遇せられているようだ。組合書記の初任給 (Junior Secretary) は週給八十七弗だから月額三百三十弗だし、高級書記 (Senior Secretary) になると百三弗、月額四百弗余になる。この外に健康保険、養老年金、歯科保険料の支払を組合が負担している。このように高給を (田賃に換算すると十万円余になる) はむ有給従業員 (職員と雇員) が組合全体

AFL—CIOを訪ねて

で一万八千人を数えるから、この AFL—CIO は、一大産業に匹敵することが出来ると説く。更に組合幹部の給料は月額一万三千五百弗、Meany 総裁に至っては年報三万五千弗、即ち邦貨一千四百万円である。然しこれは決して高給でなく。General Motors の Cartis 社長は年報七十万弗、即ち邦貨二億八千万円をとっているではないかとラッツ氏は言う。だから私は、AFL—CIO三代 Meany 氏は会長でも書記長でもなく、総裁であると言う所以である。仕事だってそうつらいとは思われない。勿論、組合幹部が如何に困難なる作戦をねっているのか、又例えば本部事務局の職員が一千五百万組合員に対する文書の受授が如何に巨額な数量に達すると雖も、能率的な機械化された操作を行っているのだし、その上、週五日勤務、三十二時間労働であると言うのではないか。何々と言っても金持国の組合ではある。

同じ組合内部でも上層と下部との関係、即ち連邦組合と地方組合との関係はどうかと尋ねて見たが、地方組合

は必ずしも連邦組合の指令方針に服従するとも限らぬよう、若しそのような場合はその地方組合を除名してしまふ由で、現在除名された組合が三つあるとのことだった。がこの除名の場合でも法律上追訴などは出来ないそうである。

組合組織化の問題については、何んと言っても北部の工業諸州が圧倒的で、南部農業地帯は稀薄である。労働者の四分の一位しか組織されていないが、之は南部は棉花やタバコの農業地帯であつて、経営者が陰に陽に圧力を加えて組合を結成させない政策を強行してからとのことだ。更に之にニグロ問題と言う人種問題がからんでいるので非常に困難な状況にある。之に反して布哇のホルルの組合は九十九%迄が日系労働者でその中で五十五%迄がこのAFL—CIOに接触を保持している。

次にラッツ氏は国際関係 (International Relations) に話を転じた。米国の海外援助は、特にアジアに対して、是非共増加せねばならぬ。米国は世界一の豊裕国だ

から之をなすのが当然であり、又之をしないとアジア未開地方の開拓が遅れ、そのために共産主義が侵透してしまふ。<sup>(2)</sup> 貿易は互惠主義でやればよい。即ち米国はその自動車其他を端西の時計、日本の繊維と交換すればよい。

(と簡単に言い切る)ぐづぐづしてはイケない。そこで世界自由労連 (International Confederation of Free Trade Union) を確立し、アジア・アフリカ、南米等<sup>(2)</sup>に新指導者と民主的に教育訓練する学校教育設備を建設せねばならぬ。以上の地域に於ける新指導者は現在迄のところ、皆モスコウ (Moscow) で教育されていたことが判明した。これで手遅れにならぬように早急之が実現を期しその資金として米国で百万弗、英国で百万弗、欧州で百万弗都合三百万弗を予定し、既に百五十万弗は集つて、現にアフリカに一校開設を見たし、印度には設立準備中であると言う話だ。

(2) サンフランシスコで聞えた共産主義に対する John A.

Owen 氏の意見。

「共産主義者は、労働組合員の個人的利益、社会国家の発展などに考慮を払っていない。共産党は革命のために組合を利用せんとしている。従って米国では組合から締め出されていて、労働運動に入り込む余地がない。」

従つてこの組合の根本思想は自由主義を基調とした修正資本主義を奉じている。この自由主義経済で米国は世界第一の富裕な国となつたのだし、そして現に高度な文化生活を営んでいられるのだから、之を今どうせねばならぬと言う必要がない。具体的に問題が起きたらその時にその問題を解決して行けばよい。例えば現在、鉄道業が飛行機やバスにおされて私企業としてやって行けないと言われて来たが、これがどうしてもやって行けないとなれば国有国营、公有公営と言うことが認められてもよいし、又そうなるであろう。だから米国経済全体から見ても、資本主義ではやって行けぬと言う窮乏時代が来たら私達は、その根本信条を変更するだろうという。

だから組合大会などでは、自由主義経済の批判が大問

AFL—CIOを訪ねて

題となり激論が斗わされることもあるが、それはいつも議論だけで終つてしまう。そして現在、実際問題として、大会の主要な議題は、現状維持即ち自由主義経済の根本基調を外れない範囲の個々の具体的な問題である。我米国はこのように生活程度の高い国だから現在では社会主義化など考える必要がない。その理由からしてもわれわれは政治団体として労働党を組織して之を支持するなどと言う必要がない。選挙に際しては、共和党とか民主党とかを問題とせず候補者個人が労働者のために利益になる政策を支持するか否かで当否を定めると言うのである。前にも聞えた通り、組合は政府にその代表を派遣して置くし、又大統領が新たに就任すると、必ず組合本部に挨拶に来るとのことだが、この辺の事情もこれで判明する。だからアメリカの組合、即ちこのAFL—CIOは、我々が日本で考えているような組合の概念ではおしはかれない。本質的に大変な距離があるようで、言わば一種のサービス企業団体とでも言ったら適當ではないだろう

か。

ラッツ氏の話は漸く終りに近づいた。一つ傾聴して貰いたい。米国の失業問題については次のような意見だった。なるほどアメリカには現在（一九五八年秋）三百

七十万の失業者がいる。然しこれを就業者六千五百万人に比すれば五%強であつて、それ程悲しむべき数字でない。と言うのは米国の生産は上昇している。消費と需要

との見合いには、就労者数は少くとも差支えない。なぜかと言えば週間労働時間は減少したとしても、之は賃上げで補充がつく。従つて有効需要を高めることが可能であるからである。米国の企業利潤は非常に高率だから、この超過利潤を少々労働者に分けてやればよい。来年度になればこの種の経済調整がほぼ完成するだろうと言うことだった。但しオートメーション(Automation)と失

業との関係は重大であるので調査部(Research Department)

で現に調査中であるが、われわれは之に反対はし

ない。と言うのは之に反対して低能率に甘ずることは、

進歩を阻止することだし、又雇主と労働者が互に協力して働き企業が運営された場合には必ず生産水準は引上げられるからである。

(3) 前掲の John A. Owen 氏はオートメーションの一番重圧を被るのは事務職員(office worker)であろうとの意見を表明していた。

勿論われわれは失業対策を忘れている訳でない。例えば、現在、週四十時間労働を、オートメーション化して能率をあげ、週三十五時間に労働を短縮し、この捻出した余暇は読書とか音楽会とか文化水準向上に資すればよい。又、労働年令を現在の六十五才から六十才に引下げ、更に義務教育を現在南部の十四年を十六年に、北部の十六年を十八年に二年宛引上げたら、これで就労人口を相当に減少することが出来ると言うのである。

最後に、わが日本の労働組合に対する彼等の希望期待と言うものを表明したが、それを要約すると、彼等即ち AFL—CIO としては、全労総同盟に対しては極めて満

足であるが、左翼の総評には賛成しかねる。従って日本の企業家が前者の発展を援助し、後者を抑圧し減少せしむるようにやって貰いたいとのこと。その理由は今更

述べる迄もないから省略するが、彼ラッツ氏は、その期待とは全然相反するような次の話をして長い説明を終つて、煙草をつけた。その話と言うのは、ラッツ氏がわが

日本の雇主達（企業家達）とこの室で話合つたとき、意外なことに、彼等は総評に対して不満はないと言ふ。な

ぜかと言うと彼等は総評を通じて対中共貿易を増大せしむる外ないからだとの返事だったとのことである。

わたくしも亦このワシントン迄来て、このような話を聞かされるとは、ホントに意外であつた。午後は労働者を訪問する約束になっていたが、兎に角ひるになったのがカフェテリア（セルフ・サービス食堂）にいそいだ。

（一九五九、三、九）